

「わたしを憐れんでください」

マルコによる福音書 10 章 46 - 52 節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、エルサレム入城を目前にされた主イエスと盲人との出会いの場面です。主イエスと私たち自身との出会いを思いながら、学んで行きたいと思います。

主イエスは何処へ行かれても、その先々でいろいろな出会いをされました。その一つ一つは、印象深い主の足跡として聖書に書き残されています。今日の場面で主イエスと出会うのは、バルテマイという五感の一つである視覚が欠落している盲人で、彼は、その一つの欠落が彼の人生のすべてを覆い、支配しているという意識でいました。当時、障害は神から来たものではなく、むしろ御心に背くものとされていて、それが障害者をさらに苦しめることになっていたのです。そのような中で、今日の出来事は、<神の御心が癒しであり、救いであること>を広く知らしめるものとなっています。

聖書には「・・・イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒にエリコを出て行こうとされたとき、テマイの子で、バルテマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と言いだした。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、『ダビデの子よ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた。」(マルコ 10 : 46 - 48) とあります。イエス一行がエルサレムに向かってエリコを出ようと、周りには目もくれず急いでいたその時、そこにバルテマイがいたのです。いつものように物乞いをしていたバルテマイの耳に入った<ナザレのイエスが前を歩いて行かれる>との声、次の瞬間、彼は『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と叫んでいたのです。この叫びは、彼の中にあつた「主イエスこそ私の救い主・メシアである」という強い思いから出たもので、暗闇の世界から解放してくださるのはこの方しかいないとの確信のもと、周りが止めるのも聞かずになりふり構わず叫び続けたのです。止める人々を振り切ってますます激しく叫ぶバルテマイ、それは生きるための、真理を求めての、憐れみを求めての、心からの叫びでした。

彼の止まることのない叫びは、エルサレムへ急がなければならなかった主イエスを強引に留まらせることとなります。彼が主イエスを自分に引き寄せた唯一の決め手は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」という彼の真っ直ぐな信仰告白でした。信仰告白こそ、私たちが主イエスを支配する唯一の瞬間であることが分かります。

聖書には、「イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。人々は盲人を呼んで言った、『安心しなさい。お呼びだ』と。盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところへ来た」とあります。叫びに応じて、主は暗闇に捨て置かれた彼を招かれた。ここに、主イエスとバルテマイの出会いが成立したのです。

彼は物乞いをする者の目印であり、彼の命を保障する唯一のものであつた青い上着を放り出し、躍り上がって、主イエスのところへ走ったと、聖書記者は書いています。彼が青い上着を脱ぎ捨てた瞬間の意味するものこそが、彼の信仰告白でした。そして、それに対する主の答えは「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」でした。

これが今日の物語ですが、私たち一人一人もこのような主との出会いを持った者です。私たちが、今ここにいることの中に、その事実はあります。主は私たちの所に来られた、主は私たちに語ってくださった、私たちは主に向かって信仰告白をした、そして私たちは、すべてのものを脱ぎ捨てて、主イエスに向かって歩いて行ったのです。その通り、その後バルテマイは道を進まれる主イエスに従ったと、聖書は記しています。

(説教要約 羽入田悦子)